

## 分析センター開所によせて

工学部 野平博之

化学分析は物質を原子・分子のレベルで理解しようとするときに欠くことのできない最も基本的な技術であるということができよう。そして、これを担う測定機器は、ますます精密化と大型化に向っている。とくに最近では、原子・分子の種類や構造を明らかにするだけでなく、これらの性質を実質的に支配している電子の状態を細かに分析できるようになってきた。

しかし、電子の状態、とりわけ化学変化の中間状態におけるそれを正確に把握するためには、理論的にも、また実験技術的にも、まだまだ未解決の問題が残されているように思われる。1例をあげれば、分子振動の周期 ( $10^{-13} \sim 10^{-14}$  秒)、あるいはそれより短時間内に起こる電子状態の変化の様子をどのような理論あるいは実験手段で追求すればよいかという問題が考えられる。私見だが、いずれこの分野の研究にも、分析技術の進歩とともに、興味深い展開がみられるものと期待している。

ところで、分析センターが発足して5年、現在センターが所管する各種大型分析機器は、いずれもそれぞれの関連学問分野の研究に携る教職員・学生にとって、かけがえのない重要な研究手段として、その機能を充分果たしてきた。

しかし、今後ますます向上する学問水準に対応していくためには、当センターは、新機種の整備と効率的な運用とともに、新しい問題に取り組むための情報交換の場としての役割も一層重要視していく必要があるように思われる。

この意味において、このたび情報処理センターというまことに時代の要請にふさわしい組織と歩調を合わせて、専用の建物の完成を迎えるに至ったことは、これひとえに須甲学長をはじめとする学内関係各位のご理解とご努力のたまものと受けとめ、その運営の一端を担ったものとして深く感謝の意を表します。そして、両センターが本学の関連分野の学問水準の向上をうながす拠点として、その機能を十二分に果たすことを期待しています。